

所 陵

ISSN-0913-1906

No.21

関西大学考古学等資料室彙報

平成2年5月31日発行



縄文台付鉢形土器（岩手県更木遺跡出土）

目 次

斑鳩藤ノ木古墳の石室と石棺の関係……………	2
北京の利瑪竇墓と宣教師墓地……………	4
異文化の中の日本の書物……………	6
雲南の銅戈……………	8
民俗資料の蒐集……………	10
平成元年度調査報告「和歌山県・三重県」の遺跡と博物館……………	12
藤ノ木古墳出土石棺の複製……………	14
資料紹介－信楽焼と小鹿田焼－……………	15

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35

Tel 06-388-1121（内線3341）

斑鳩藤ノ木古墳の石室と石棺の関係

網 干 善 教

昭和60年7月22日からじまった奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺西2丁目1795に所在する藤ノ木古墳の発掘調査は、同年12月31日までの間に第1次調査が実施された。この調査によって古墳は両袖式の横穴式石室に、刳抜式家形石棺1基を納めた構造であることや、石室内に土器や馬具など多量の副葬品があることが判明した。

第1次調査のあと、墳形の確認・ファイバースコープによる石棺内視の第2次調査、ついで、第3次調査では石棺内の調査が行われ未盗掘であったため多くの副葬品が出土し、注目をあつめた。

ところで、平成2年2月28日付で『斑鳩、藤ノ木古墳第1次調査報告書』が刊行された。したがって、これ以後はこの正式報告書に基づいた考察、論証が行われるであろう。そこで調査当初から抱いていたいくつかの点について、機会があれば検討を試みようと思うが、その一つに石室の構築と石棺の関係がある。

石室は南北方向に主軸を置く。これに対して玄室内に納められた石棺は、石室の奥まった位置で、奥壁に沿うように主軸と直交する状況、すなわち東西方向に置かれていた。こうした例は奈良県下では文献上橿原市五条野丸山古墳や実例として桜井市茅原狐塚古墳、広陵町三吉牧野古墳などでも知られているが、主軸に平行する形式に比べて少ない。

さて、報告書に記述された石室と石棺の計測

値をみると次の如くである(単位cm)。

まず、石室は

玄室	長	西側	604	東側	567
	幅	奥側	243	中央側	264
羨道	幅	羨門	208	中央部	176
	高			中央部	238
				玄門部	227

とある。次に石棺は

棺蓋	長	229.5
	幅	東側 130 西側 115.9
棺身	長(底)	234.8
	幅(底)	東側 139.4 西側 133.9
	高	東側 96.6 西側 79.8

とある。なお、棺身は「側面、小口面とも底が広く、基本的に台形を呈している」とある。

そこで、この数値から対角線の長さを割出してみると(角度が不明なので正確な数値ではない)棺蓋は長さ229.5cm、東幅130cm、西幅115.9cmであるから対角線の数値は約263.7cmとなる。

次に棺身の方は長さ234.8cm、幅東側139.4cm、西側133.9cmであるから対角線の計算値は約273cmとなる。そこでこの数値をもとに玄室内に石棺を安置する作業を想定してみる。

すでに石室が完成し、その後に石棺を納める場合を考えてみると、石室奥側の幅が243cmであり、棺身の長さが234.8cmであるからその差は8.2cmとなる。これに対して対角線は273cmであるから、石室奥壁幅より30cmも長く、南から北に向って搬入してきた石棺を、東西方向に90



度回転させることは不可能である。

玄室中央部の場合でも玄室幅が267cmしかなく、対角線長273cmの石棺を回転させることはできない。玄室入口側の場合も242cmであるから同様である。

もう一つの方法として、石棺を横転させて搬入する場合を考えてみると、石棺身長234.8cm、高東側96.6cm、西側79.8cmであるから、その対角線の長さは247.9cm、中央部では数字的には辛じて可能性はあるが、重さ約5トンもあり、軟質の凝灰岩の石棺を奥壁から80cmの間隔しかない位置に、これを転して正位置に、しかも何の破損もなしに据えることは、狭い石室内の作業としては不可能に近いことである。

このように考えると石室を完全に構築してから石棺を納めることは、現実の問題として行い難い。そうした例は桜井市倉橋赤坂天王山古墳や同市谷艸墓古墳でも指摘できる。

特殊な事例としては高市郡高取町市尾の墓山古墳では玄室の奥壁のところから搬入し、その後閉塞されたことが報告されている。

藤ノ木古墳の場合、市尾墓山古墳のようなことがないとすれば、当然石室構築前、もしくは石室の架構がある程度進捗した段階で石棺を安置する作業があったと考えられよう。

後者の場合一つの重要な視点は石室東西両側、奥壁側の石積の上面が同じ高さになっていなければ作業は非常に困難である。しかも、重い石

棺の安置作業であるから危険をとまなう。なお、玄室の東、西両壁が持ち送りの構造となっているから、石棺の長さより狭くなっていれば作業はできないことになる。

そうした観点から玄室の東、西両壁及び奥壁の石積みを観察すると、玄室床面の敷石面から約240cm上部、すなわち、玄門見上げ石の下端のライン、東壁面では入口側3段目、奥壁側中央で2段目のところに石積みの継目がみられる（Aライン）。もう一つは一段下の120cmのところ、すなわち入口側2段目、奥壁側3段目のところにも石積の上面がある。（Bライン）

これに対して西壁面でも見上げ石下端のライン、すなわち約220cmのところの入口側2段目、奥側3段目のところに石積の上面があり（Cライン）、その各々1段下のところ、すなわち約140cmにも石積面がある。（Dライン）

奥壁側を見ると玄室床面から約150cmのところでは石積や使用している石の大きさにも上下相違がみられる。（Fライン）

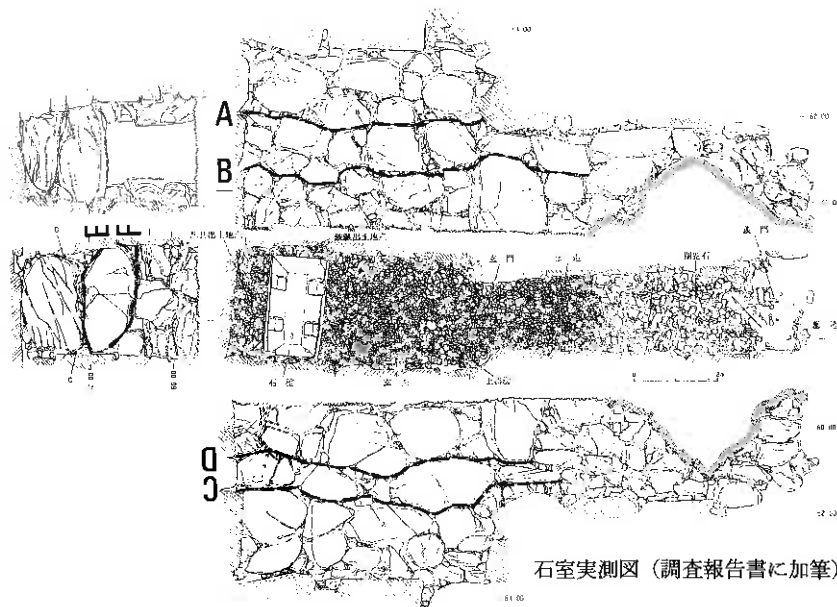
東、西両壁の場合、上下のいずれの石積みの線を考えるかによって見解が異なるであろうが、試案として奥壁の状況を判断の材料にした場合下の方のラインまで構築した過程で石棺を搬入、安置したと考えられないだろうか。

さらに石室の石積みを観察すると、東壁面と西壁面とでは石材の大きさ、形態がかなり相違するし、入口側と奥壁側でも異なる。また奥壁側

では下段と上段では歴然と違うことも知る。使用している石材の大きさにも明確な差違が認められる。

玄室と羨道を比較した場合も同様である。

豪華な副葬品にのみ目をうばわれないで、構造上の問題も検討する必要がある。



北京の利瑪竇墓と宣教師墓地

松 浦 章

1. 緒言

1724年（雍正二）北京滞在中の者を除き、中国からの国外追放の命を受けたキリスト教宣教師は、雍正帝に嘆願書を提出した。そのなかで、彼等の中国渡来後の状況を次のように記している。

利瑪竇以来、陛下の忠実な臣下であるわたしどもが海路によってこの東洋の地に来たってから約二百年経ちます。聖朝は特別の御恩恵をもって、わたしどもを外国人とは少しもお考えになりませんでした。そのためわたしどもはシナをわたしどもの真の郷里であるかのように考えるようになり、わたしどもはシナの風俗に従っております。

（矢沢利彦氏訳『イエズス会士中国書簡集 2』平凡社・東洋文庫190、42頁）

キリスト教伝導のため外国に渡った宣教師の多くは、異国の地で生活し没した。明清時代に中国へ渡来した彼等もその例外ではない。彼等の墓地を昨年1989年8月、北京で参観する機会を得たのでここに些紹介したい。

2. 利瑪竇とその墓地

北京の海淀区車公莊大街6号、北京市党委学校の構内に北京市文物保護単位〈利瑪竇墓及明清以来外国传教士墓地〉（写真①）として整備された一区画がある。同地の来歴を以下簡単に述べてみたい。

『明史』巻25、天文志1に「明神宗時、西洋人利瑪竇等入中国、精於天文、曆算之学、発微

闡奥、運算制器、前此未嘗有也」と中国へ欧州の科学文明を伝えた利瑪竇等宣教師の活動を高く評価している。

その先駆者が利瑪竇即ちマテオ＝リッチであった。利瑪竇から大きな影響を受けた一人に徐光啓がいる。徐光啓は『明史』巻251、列伝巻139に「徐光啓、字子先、上海人。（中略）從西洋人利瑪竇学天文、曆算、火器、尽其術」とあるように、利瑪竇より多大の学問的影響を受け、早くも明末において〈中体西用〉を実践した先駆者であったと言える。

利瑪竇は苦難の末、萬曆二九年（1601）北京滞在を許され、多くの業績を残し萬曆三八年（1610）北京で死去した。徐光啓は彼の死去を悲しむこと「師傅の如し」であったと言われていた。（『徐文定公行実』、梁家勉氏編著『徐光啓年譜』上海古籍出版社、1981年4月、95頁）。

『神宗実録』巻470、萬曆三八年四月壬寅（二七日）の条に「賜西洋国故陪臣利瑪竇空闲地畝埋葬」とあり、リッチの墓地として萬曆帝より下賜された地は「阜成門外^{初名平則門}隙公柵官地二十畝、房屋三十八間」（清末の黄伯禄の『正教奉褒』明朝、萬曆三八年の条）であった。明・劉侗等の『帝京景物略』巻5、利瑪竇墳に「阜成門外二里、嘉興觀之右」と記し、清の『欽定日下旧聞考』巻96にも「嘉興觀在阜成門稍北而西、（中略）西即利瑪竇墳」とある。皇城阜成門外の北西に位置する土地であった。

3. 宣教師墓地と郎世寧

利瑪竇墓地の状況をイエズス会士は1703年（康熙四二）の書簡に「われわれの墓地は先朝の皇帝たちのうちのひとり（萬曆帝）がわが会の初期の宣教師たちに与えた郊外の一庭園のなかにあります。この庭園は垣で囲まれ、そこに一礼拜堂と数個の小建物が設けられております」（矢沢氏訳『イエズス会士中国書簡集1』東洋文庫175、138頁）や「マッテオ・リッチ師の墓は庭園の一番はしの際立った位置に、あたかもかれがこのミッションの創設者であったことを語るためであるかのように設けられてあります。他のひとびとの墓はつぎの図で明らかなように、



① 北京・車公莊 利瑪竇等宣教師墓地



② 利瑪竇・湯若望・南懷仁墓地

リッチの墓の下手に二列に並んでいます。」(矢沢氏同書、139頁)と記しているが、現状は南に向いて利瑪竇墓を中央に、右に湯若望(アダム＝シャル)墓、左に南懷仁(フェルビースト)墓がある一区画(写真②)と東に隣接した一区画があり、その中の多くの宣教師墓が整然と並んでいる。(写真③)。

宣教師墓地の中に郎世寧(カスティリオーネ)墓(写真④)がある。世界史の教科書等でも著名な彼の墓は他の宣教師墓と比較して意外に小さかったことが印象的であった。墓の大小は清時代における彼等の社会的地位と関係する。湯若望と南懷仁は『清史稿』巻272(中華書局本による)に湯若望、楊光先、南懷仁と三人で一巻の列伝が立てられているのに対し、郎世寧は同書巻504、芸術3に「郎世寧、西洋人。康熙中入直、高宗尤賞異。凡名馬、珍禽、琪花、異草、輒命図之、無不奕奕如生。設色綺麗、非秉貞等所及」と僅か四十余字で記述されている。しかし、郎世寧の画家としての実力は康熙帝か



③ 宣教師墓地

ら信任され『耕織図』作成に携わった欽天監の焦秉貞等を凌いでいたのである。

郎世寧が乾隆帝より寵愛を受けたことや彼の業績は石田幹之助博士の「郎世寧小伝稿」(『東亜文化史叢考』財団法人東洋文庫、1973年3月、409～465頁)に詳細が述べられている。

4. 小結

上述のように、利瑪竇等宣教師の墓地とされた地は、利瑪竇の死後、明の萬曆帝より下賜された地と同地であったが、清末の義和団事件で多大の破壊を受け、墓地の配置等が設置当初(矢沢氏『北京四天主堂物語』平河出版社、1987年9月)とは大きく様変わりしていることが知られる。事実、湯若望、南懷仁墓は墓石そのものに破壊された痕跡がはっきりと見られる。特に南懷仁墓は写真(写真②右側)からも明かである。その後、幾度かの修復を経て、1984年北京市によって現状のように修復された。

参観の機会を与えられた北京市社会科学院外国問題研究所所長楊正光教授並びに中国社会科学院歴史研究所馮佐哲副教授に末筆ながら謝意を表する次第である。

〔注〕利 瑪 竇：Matteo Ricci

湯 若 望：Johann Adam Schall von Bell

南 懷 仁：Ferdinand Verbiest

郎 世 寧：Giuseppe Castiglione



④ 郎世寧墓

異文化の中の日本の書物

鶴 崎 裕 雄

一昨年（1988年）の夏、2週間にわたって、文部省研究費による「在外国文学資料の所在に関する調査」（研究代表者、国文学研究資料館教授長谷川強氏）に参加し、イエール大学バイネッケ図書館（Beinecke Library）と合衆国会図書館（L.C.）に所蔵されている江戸時代以前の写本・版本を調査する機会があった。

調査員は、国文学研究資料館の新藤協三氏・吉海直人氏・いわき明星大学の田嶋一夫氏及び私の4人。調査対象は、国文学資料といっても、実際にはあらゆる分野の日本の古典籍を扱うので、主に日記・古記録の調査のため、私も調査員の一人に加えられたのである。何分膨大な書物を前にして、調査の2週間はかなりきびしいスケジュールであった。

イエール大学と議会図書館が選ばれたのは、そこにある朝河コレクションに対象をしばったからである。朝河コレクションとは、歴史学者としてアメリカで活躍した朝河貫一博士が、両図書館の依頼を受けて収集した500点に及ぶ日本の写本・版本である。

朝河博士は、明治6年（1873年）福島県二本松の出身、少年時代より大変な努力家で、中学生の時、英語の辞書を覚えては、そのページを次々と食べてしまったという逸話がある。東京専門学校（現、早稲田大学）に学び、アメリカに渡って、ダートマス大学に留学、続いてイエール大学大学院に進んだ。卒業後、アメリカに留まり、ダートマス大学、ついでイエール大学

で東洋史・日本史を講義した。

朝河博士が日本の書物の収集依頼を受けたのは明治39年、イエール大学より日本留学を命ぜられた時である。両図書館とも朝河コレクションには“1907”という数字が記されているが、これは書物が入庫した1907年（明治40年）を示している。

収集された書物は、購入したものばかりではない。『看聞日記』や『大乗院寺社雑事記』『二水記』など、かなりの日記や古記録は、人を雇って書写させている。今のように写真技術やコピー器具のない時代、幾冊もの書物が筆で写されたのである。

新たに書写されたものには『大阪商業習慣録』『米商日記』（別名『堂島旧記』）『大阪昔時の信用制度』といった大阪の商業に関する書物が多い。これは、書物の収集にあたって、当時『大阪市史』に従事していた幸田成友博士（幸田露伴の弟）の協力を得たからである。

一方、江戸時代に書かれた武士の記録や覚書の類がある。これらは単に「覚書」とあったり、書名のないものが多く、日常の武士の儀式や慣例を記したもので、今となっては武士社会を知る好史料である。しかし江戸から明治へと新時代を迎えた時、これらの書物は全く役に立たない、陳腐な代物として、紙屑同然に扱われたことであろう。それはちょうど浮世絵と同じ運命にあった。江戸末期から明治時代、国内では無価値なものと思なされていた浮世絵は、海外では丁重に扱われ、大切に保存された。同じ頃、日本では顧みられなかった江戸時代の無名の書物も、こうしてイエール大学や議会図書館で保存されていたのである。

今回、2年近くも前の調査の事柄を一文にしたためたのは、今年（1990年）夏、スペインのマドリッド大学で開かれる国際歴史学会とドイツのボン大学で続いて催される日本中世研究セミナーに参加するからである。スペインの国際学会では、「マルコ＝ポーロ以後の古文書」（Manuscripts Resources from the Age of Marco Polo）というテーマで、ユーラシア大陸の東西を支配したモンゴル帝国の出現が世界の古文



合衆国会図書館（L.C.）

書に与えた影響について研究発表が行われる。
日本からは東京都立大学の峰岸純夫氏や大阪市立大学の河音能平氏が中心になって参加準備が進められている。

このような国際歴史学会で必ず取り上げられる論文に、朝河博士の英文で書かれた『入来院文書』（The Documents of Iriki）の研究がある。これは日本の古文書が欧米語で海外に紹介された最初の論文である。国際学会への参加準備会で朝河博士の名を耳にして、イエール大学や議会図書館で手に取った朝河コレクションを思い出した。

初めて朝河コレクションを手にして驚いたことは、和綴の写本や版本が、現在の一般図書のように、洋風に装丁されていることであった。そのため天地や横が裁断されてしまった書物もある。日本に帰って『幸田成友著作集』を読み返してみると、「朝河貫一氏が日本で購はれた時、数冊分を合して全然西洋風に改装せられたのを見て、自分は不賛成を唱へたことを記憶する」（第7巻 364頁）とあった。洋風に装丁された和綴本を見て、幸田博士も、同じように奇異に思われたのである。

しかし、もう少し考えてみると、朝河博士の改装をそう簡単には否定できないことに気付く。今でこそ議会図書館の日本フロアの貴重図書の書架には、帙や木箱に入った和綴本が置かれているが、今世紀の初め、80年も以前、日本や中国の書物がアメリカやヨーロッパの図書館に収められるには、洋風に改装する方法が一番良か



イエール大学のあるニューヘブレン市墓地の朝河貫一博士の墓

ったのかもしれない。横に積み上げるのではなく、立てて並べる書架の中で、つまり異文化の中で、和綴本が保存される一つの手段といえよう。

それはまた、明治から昭和の初めまで、国際社会の中で一流の学者として活躍した朝河博士の生き方に通じるものかもしれない。朝河博士の時代から今日までの間、日本の変化は目紛しい。日本の国際化と同様、あらゆる分野の学会の国際化が求められている昨今である。

朝河博士は、昭和23年（1948）76歳で亡くなった。

墓は、永年務めたイエール大学の所在地、ニューヘブレン市の墓地にある。



イエール大学バイネッケ図書館前の調査員

雲南の銅戈

来 村 多加史

関西大学考古学資料室所蔵の海外文物に「中国雲南省城出土の銅戈」がある。資料室の記録では「安田氏寄贈」とあるが、中国国外流出の経緯は明らかでない。

戈は鋒の尖端と秘^{ひつ}に装着する「内」の部分が欠けているが、銹化はそれほど進んでおらず、紋様も子細に観察できる状態で残っている。大きさは、長さ12cm（残長）、高さ13cm、最大幅1.6cmと、ちょうど手のひらに乗せれるほどの寸法である（図1）。

雲南省の省都である昆明市の南には、面積約340km²の滇池^{てんち}と呼ばれる同省内最大の湖が横たわる。この湖の周辺には、戦国時代から前漢時代にかけて独自の青銅器文化が栄え、『史記・西南夷列伝』に「滇」と記された民族がその文化の担い手であったことが文献の考証から明らかにされており、1956年に滇池湖畔の石寨山古墓群で発見された「滇王之印」の金印はその族属を決定づける実物資料となっている。

石寨山古墓群は滇国の王族の埜地^{せきさいざん}で、凡そ戦国晩期から前漢晩期にかけての大型墓が多数検出されている。また、これとは別に滇池南方の江川県で李家山古墓群と呼ばれるやや時期の早い王墓群が発掘されている。

それらの墓の相対年代を決める標準器物として、墓内から出土する青銅器が選ばれているが、中でも武器としての実用性を残した青銅戈は改良の足跡が辿りやすく、普遍的に副葬されていることから、中国の研究者の間でも年代決定の指標として利用されている。

図2に掲げた銅戈の遍年図は、雲南の青銅器文化が四川地区の青銅器文化の影響下に発達したものであろうという前提のもとに組列したものである。

図中左列のA形式には無胡式、中列のB形式には長胡式、右列のC形式には双胡式の銅戈を上から下へと古いものから順に並べている。

このうち、とりわけB形式としてあげた銅戈は、鋒・胡とともに長く作られ、援身から「内」に向かって翼状の突起が付き、秘への装着をより堅固なものとするように工夫された形式のものである。

その祖型と考えられる四川省成都市百花潭中学10号墓出土の虎紋銅戈は、虎の耳が欄から後方へ突き出て戈の横ぶれを防ぐように作られたもので、その虎耳は翼状突起の先駆けとなる。このような戈は甘肅あたりでは西周期から見られ、四川においては秦が蜀を滅ぼした紀元前4

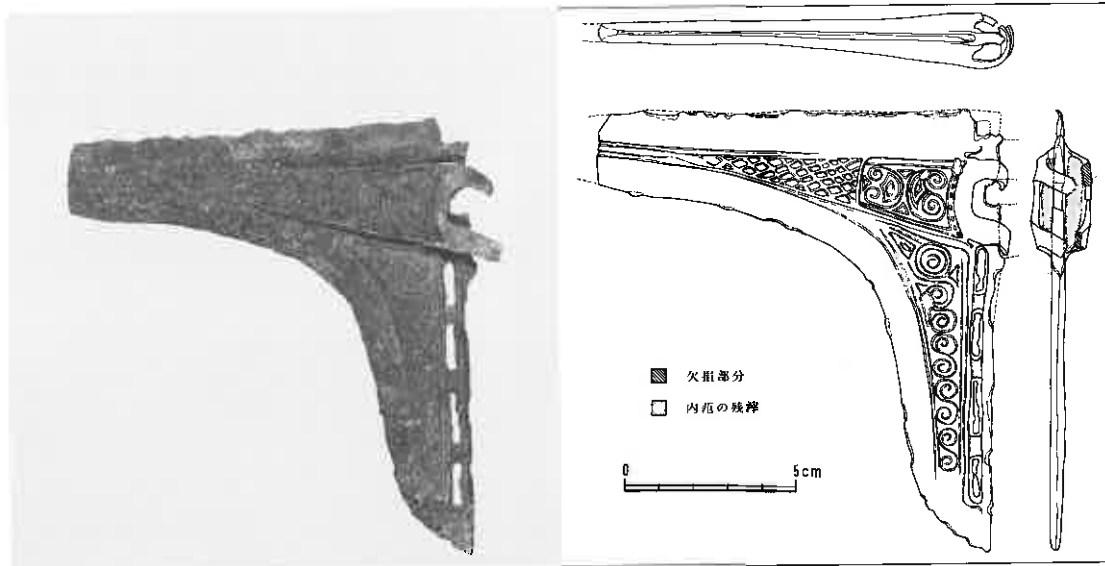


図1 関西大学所蔵銅戈の器影と実測図

世紀末頃まで生産される。その流れを汲むものとして示した四川省簡陽県内窖藏遺跡出土の龍紋銅戈は、虎紋銅戈の虎耳が発達して長条形の翼状突起となったもので、伴出器物の年代から、戦国晩期に製作されたものと考えられている。

B1型式としてあげた李家山13号墓出土の渦紋銅戈が簡陽の龍紋銅戈を模範としていることは歴然としており、援身中央の三角紋様区内に施された斜格子紋は、龍紋銅戈の三角紋様区の外縁を飾る雷紋のアレンジで、援身後部の渦紋は龍紋銅戈の蟠龍が抽象化したものであろう。その翼状突起は同じく長条形に作られるが、突起の尖端は僅かに分かれ、B3型式として例示した石寨山13号墓出土の渦紋銅戈へ続いてゆくものである。

器物の性能から言えば、関西大学所蔵の雲南銅戈は、これらの翼状突起付き銅戈の最も発達した段階に属している。つまり、二又に分かれた突起部は、長く伸びて秘を取り巻くように内曲し、横ぶれ防止の機能が最大限に活かせるように工夫されている。また、欄には幅の広い五つの孔が穿たれ、革ひもによる補強が胡の端ま

で及ぼせるように考慮されている。一方、紋様の変化に着眼すれば、B1・B3型式のいずれの要素も備えており、系統的には、その間に置かれるものと考えられる。

編年図のA1・B1・C1型式の銅戈は、共伴器物の組み合わせから、滇池青銅器文化の李家山期（戦国晩期～前漢初期）、A2・B3・C2型式の銅戈は石寨山期（前漢中期～後漢初期）のものと同定される。よって、B2型式として設定可能な関西大学所蔵の銅戈は前漢時代の滇池青銅器文化の遺物とみて大過はなかろう。

その出土地点が詳らかでないのは悔やまれるが、このように雲南の青銅器文化に直接触れることができる遺物として、本品の資料価値は高く評価される。

参考文献：雲南省博物館編『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』文物出版社、1959年；雲南省博物館「雲南江川李家山古墓群発掘報告」(『考古学報』1975年第2期)

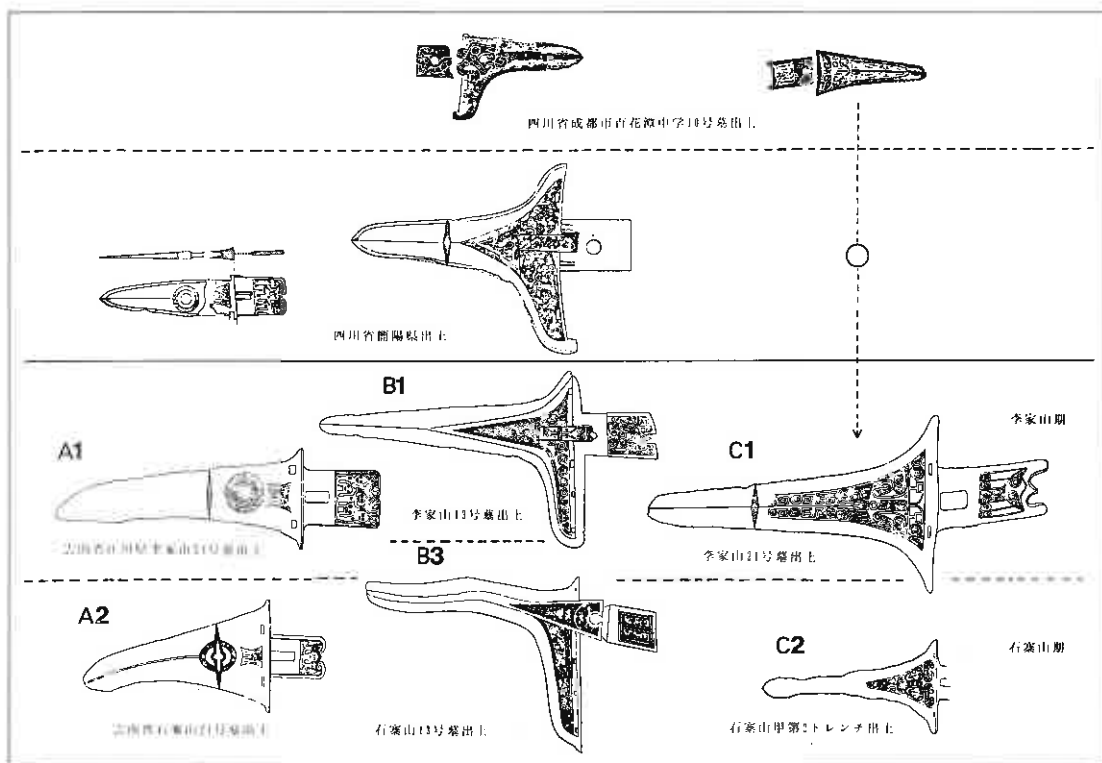


図2 中国西南地区銅戈の編年図

民俗資料の蒐集

角 田 芳 昭

考古学等資料室においては資料の充実と教育研究の向上に務めている。平成元年度はかねてよりお願いしておいた民俗資料を寄贈して下さいということになり出向した。岡山縣（備中国）上房郡賀陽町吉川地区及び黒山地区の農家のご協力を得、多数の農具、民具を蒐集することができた。

平成2年（1990）3月16日早朝出発し、岡山駅より運送業者のトラックに同乗して現地に午後1時到着した。当地区は岡山駅よりバスで北西へ約1時間、備中高梁駅よりバスにて東北へ約40分のところにあり、標高500mの山村で、農業が中心であり、乳牛の飼育が盛んである。山村部であるので、四季折々に苟の野菜が豊富である。第2次大戦までは養蚕もさかんであり、桑ノ木が沢山植えられていた。終戦直後はイ草の栽培もさかんであったが、現在ではほとんど見当たらない。近年の変貌、発展は目覚しく、土地区画整理事業とともに、国立の施設及び大企業も誘致され、活気に満ちているが、反面、この貴重な民具資料がどんどん捨てられている。旧家では明治初年頃建てられた家も多く建替の時期で納屋の隅に眠っている農具もおしげもなく焼かれているのが現状である。我々の祖先が使い、残して来た農具は保存したいものだ。

農具、民具資料は小倉衛氏（筆者の実兄）末子御夫妻のお骨折りで既に多数が小倉家の庭先へ集収されていた。休憩の後早速梱包作業と寄贈者の氏名をメモし張付けていった。その点数約80点であった。その整理中友人の堀求氏（賀陽町役場吉川支所長）が吉川地区の新らたに寄贈された農具資料20数点を持参下さり、合計約100点となった。

農具関係資料として除草機（田の草とり機）、二段除草機、犁（俗称ウシガ）、馬鍬（マンガ）、二段馬鍬、牛鞍、鍬、物入籠、唐箕、口ふご、雨具（着ごさ・みの）、わたくり機、唐臼、縄ない機、箕、網杵、田植網、糸車、鋸などであった。旧家の納屋にはまだ多数の使い古した道具が入っているといわれた家もあり次回お願いすることにした。

民具資料として茶釜、羽釜、角樽、朱塗繕、黒塗火鉢、ガス燈、大小盆、大瓶、蒸籠（セイロ）、急須、土鍋（ユキヒラ）柱時計、火縄銃、掛軸（各種）、双眼鏡、燈火器、アイロン、ひな人形、五月人形、鯉のぼり、祭り旗、薬研、陶枕、葉たばこ結束用圧搾器などであり、農具など同種のものが多数集収されていた。友人難波弘泰氏（賀陽町農業協同組合参事）及び重森計巳氏（賀陽町会議員）には蒐集について諸々助言して下さい。寄贈者の姓名は次ページのとおりであり、誌上において感謝申し上げる次第である。

近年、市町村営の歴史民俗資料館に類する博物館、資料館が多数設立されており、いずれの地方でも見かける情景となり、民俗文化の向上に寄与し、住民の意識も高い。しかしこれらの資料の展示についてみるとただ雑然と並べてあるという状態になっている資料館が多いことだ。学術的に調査研究し、展示についても照明、資料解説、収集地、使用方法など郷土との関連について記述し、見学者に容易に理解できるように展示をし、民具をして語らしめるような視聴覚効果も期待したい。

今回本学資料室に貴重な資料が多数寄贈されたのを機会に、これらの資料を活用したならば、学芸員養成の質的向上に寄与できるものと考え。機会があれば再度訪問し、民俗資料について調査し、その分布を明らかにするとともに、資料の充実をはかっていきたい。今回感じたことは、文明が発達し、生活が向上するにつれ、田舎の生活も徐々に変貌を来とし、農具、民具（生活必需品）も次第に失われつつある。郷土に資料館等を建設し保存すると同時に学術研究機関においても営意蒐集し、保存、記録していかなくては後世に悔いを残すことになる。多数の民俗資料といわれるものが、その価値を見い出されないまま捨て去られているのは非常に残念である。学術資料として活用できることを地区住民の人々に認識してもらうことも必要であると感じた。この一文が少しでも役立つならば幸いである。



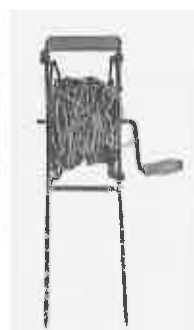
「おひな様」小倉衛氏寄贈



「急須（大江焼）」
大倉亀一氏寄贈



葉たばこ結束用圧搾器
西谷喜代子氏寄贈



田植銅



「朱塗角樽」小倉清氏寄贈



「黒漆塗火鉢」大久保敏夫氏寄贈



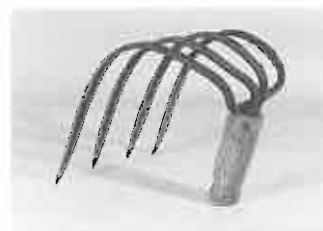
「陶枕」西谷芳子氏寄贈



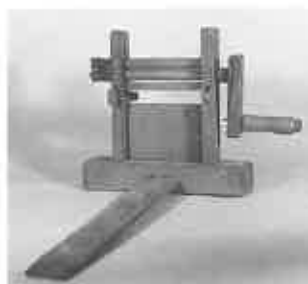
「茶釜」堀求氏寄贈



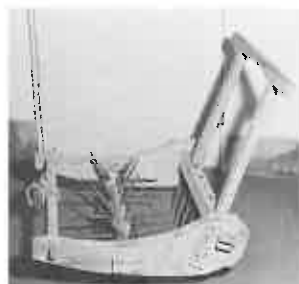
「時代人形」大倉求氏寄贈



「雁爪」（手持除草具）重森計巳氏寄贈



「わたくり機」西谷猛氏寄贈



馬鋏（マンガ）西谷岩男氏寄贈



「犁（俗名ウシガ）」山本万一氏寄贈



「茶席水指」小倉靖氏寄贈



「茶席用飯櫃」小倉靖氏寄贈

平成元年度 寄贈された民俗資料の一部
(岡山県上房郡賀陽町吉川地区・黒山地区)

「和歌山県・三重県」の遺跡及び博物館施設

考古学等資料室所蔵の資料について毎年その出土地の確認・写真撮影などの調査を実施し、その様子を報告してきたが、平成元年度は近畿南部の和歌山県及び三重県の遺跡を調査見学したので、ここに記しておきたい。

本学所蔵の両県資料として「紀伊国西牟婁郡田辺町」「紀伊国海草郡鳴神貝塚」「志摩国志摩郡答志村和具」「志摩郡濱島」「志摩郡鐘浦村」「伊勢国多氣郡齊宮村岩内」「伊勢国河藝郡矢名村御園土山」の遺跡名が『本山考古室要録』に見える。しかし本学には若干の資料しか存在しない。調査は平成元年8月23日、24日、25日の2泊3日を要し、文学部網干善教授（資料室管理運営委員長）指導のもと角田芳昭が同行した。

8月23日早朝天王寺より出発し、紀伊田辺へ着く。中川貴氏（本学校友・田辺市立歴史民俗資料館学芸員）のご案内にて市内の遺跡、博物館施設を廻る。先ず田辺市立歴史民俗資料館を見学する。田辺市の歴史が一目で理解できるよう古代より現代までが実物資料、パネル、模型、写真をとり入れ展示されている。中川学芸員のご説明で展示の意図や歴史が良く理解できる。悩みは専任職員1名とそれに収蔵庫の狭隘さであり、今後の解決すべき問題であると話された。社会教育施設の共通の問題点でもあるようだ。引続き本学資料出土遺跡とされる「田辺町」と記されている弥生土器片出土地を調査したが、ほとんど消滅し周辺に面影が残っているのみで、土器片も見当たらなかった。続いて縄文遺跡として著名な高山寺貝塚跡を見学する。当貝塚は厚手押型文土器を中心とする前期土器が出土し、昭和14年国指定文化財となり保護されている。田辺市稲成町糸田にあり、今津川と交流の稲成川にはさまれた、南西にのびる細長い丘陵の先端近くに位置し、標高30mである。昭和13年と40年に発掘調査され、遺構は検出されていないが貝層はハイガイ、アカガイ、カキ、ハマグリ、シジミなどを主体にしており、貝層中よりイノシシ、シカなどの骨も検出された。高山寺式土器の標式遺跡であり、礫器、石英及びサヌカイト製の石鏃、敲石、石錘、凹石などが出土している。高山寺は他に聖徳太子像、仁王像、大日

如来坐像、弘法大師像、多宝塔、愛染明王などの文化財が多数所蔵されており、また本堂地下に所蔵資料室が設置されており、当出土遺物、民俗資料等が展示されていた。現在「史跡、高山寺貝塚」の石碑が2柱建立されている。時間が許されるなら再度調査したいものだ。

「鳴神貝塚」は明治28年発見されて以来たびたび発掘調査がされており現在国指定史蹟となっている。ハマグリとハイガイを主体にする貝塚で、カキ、アサリ、シジミなども検出されており、シカ、イノシシ、クマ、カモなどの獣骨を出ている。明治38年鳥居龍藏博士も調査採集された記録もあるので、本山彦一氏（元・毎日新聞社長・本山コレクション寄贈者）と親密な関係にあり、発掘調査にも度々同行されていたので、本学資料もあるいは鳥居博士採集資料が本山氏へ寄贈されたのではあるまいかと推察する。その後景観と自然保護運動に一石を投じたナショナルトラスト運動の発生地「天神崎」を見学した。静かな海と自然がそこに横たわっていた。美しい自然は一度破壊されると元へは戻らない。地元を中心に県、国も保護について検討していただきたいものだと思う。このことは文化財や遺跡の保護についても同様のことがいえるのではないだろうか。夕刻宿舎の白浜「紀洋閣」に着いた。窓からの夕日が素晴らしい。翌日は一度天王寺へ戻り再度関西本線で鳥羽市へ行き船にて答志島へ向う。答志島和具出土須恵器の所在調査である。館民生氏のご案内にて島内の遺跡を歩く。館民生氏は郷土史家であり長年教職にあった人で、また本誓寺の住職も兼ねておられる学職者である。港まで出向いて来られ、本学資料の由来を話すとその遺跡は岩屋ヶ原古墳群と思われ現在保護されていないが、そこより出土した多数の土器が答志中学校へ保管してあるといわれ早速見学にいく（次ページ右下）、展示ケースに入れられ廊下へ並べられており、社会科の教材として活用しているとの事であった。同様の須恵器資料も多数あり、ここで採集され本山氏へ納まったものと推定する。その後島の歴史等をお宅へ伺いお聞きした。答志島は古来より栄え、また現在も遺跡や文化を大切にされる人が多く、写真の石碑等（答志島

を歌った山家集四首の内)が随所に建てられている。将来の発展が約束される島であると確信した。

夕刻再び伊勢へ戻り1泊し、翌日の3日目は伊勢市を中心に調査を行なう。本学校友で伊勢市在住の水野昌光氏のご案内にて社寺、資料館を巡検する。まず伊勢市立郷土資料館を見学する。クラシックな建物で宇治山田郵便局の別館として建てられ、資料館として譲り受け開館したそうで、伊勢市の歴史が一目で理解できるよう展示ケース、壁面を利用し展示解説されている。



田辺市立歴史民俗資料館 展示風景



田辺市高山寺貝塚石碑



答志島石碑 (山家集四首ノ内ノ一)



伊勢神宮徴古館



答志島 答志中学校 展示資料

た。今後の発展が期待される。続いて伊勢神宮徴古館、農業館を見学する。徴古館は伊勢神宮内にあり、さすが歴史の重みを感じさせる雰囲気がある。伊勢神宮の宝物といわれる多数の資料を実見し、図書や図録では得られない貴重な体験を行った。特に歴史絵画の掛軸が多数展示されており、非常に参考となった。またすぐ近くに設立されている農業館においても伊勢地方の農業の歴史が一目でわかるよう展示され、稲の品種改良や漁具の発達史などは興味がそそがれた。再度調査を行ないたい地方である。ご案内、ご説明下さいました皆様に御礼申し上げます。〔角田芳昭〕



本学所蔵 答志島和具出土 須恵器

藤ノ木古墳出土石棺の複製

昭和60年7月より調査発掘され、国宝級の馬具及びその他多数の遺物が発掘された藤ノ木古墳出土石棺をこのほど実寸大で複製した。

当資料室においては継続して資料の充実につとめており、発掘当初より石棺の複製を計画し、法人当局のご理解により予算も計上されていた。此度発掘調査が終了したので橿原考古学研究所と地元斑鳩町の了解を得、発掘調査に協力された飛鳥建設株式会社の手により立派に複製された。作成経費について予算をはるかに上廻ったが、飛鳥建設左野勝司社長のご英断により無事納入して下さった。ここに感謝申し上げる次第です。

4月8日「関西大学校友会スプリングフェスティバル」において多数の校友の見学者があり、

テレビや写真では見ていたが、実寸大の石棺を見たのは最初だ。なかなか迫力があると好評であった。その折橿原考古学研究所より借用した写真及びパネルにも人気があった。今後はこの古墳に関する資料の収集と石棺を利用して一層の教育研究が充実されるなら幸いである。

大阪市立博物館特別展「藤ノ木古墳とその時代」展が開催され、連日多数の見学者が訪れている。資料の実見とハイビジョン映像の画面説明に人の輪ができています。今後の展示のあり方を示す好例であろう。本学においても石棺の周囲に展示ケースを設置し、写真、パネル資料を展示しているが、今後は関連する写真、図書、パネル及びビデオテープ類等を収集し、一層充実していきたいと考えている。



考古学等資料室へ運び込む



複製なった石棺



飛鳥建設株式会社彫刻現場の石棺作製風景（平成2年3月上旬）

資料紹介—信楽焼と小鹿田焼—

本学資料室に日本6古窯のうちの1つ「信楽焼」古壺10数点を所蔵している。室町時代後期のより桃山時代の茶陶壺までの資料で現在6点を第2展示室へ展示している。信楽焼は滋賀県甲賀郡の信楽地方で生産されてきた陶器で、鎌倉時代から焼かれており、現在も長野、^{ちやうし}勸旨、^{きのせ}黄瀬、^{こうやま}神山などの窯で続いている。桃山時代以前の備前と同様素焼の焼締めを特色としており、中世の信楽（古信楽は甕・壺，すり鉢などの雑器が主で、成形はロクロによらず、巻上げの紐造りで、下駄印のあるものが多い）室町時代になると茶の湯の流行により茶壺が盛んにつくられ、素地が砂まじりでざんぐりして茶味をよく保つ上から、和物の茶壺では最上とされた。また珠光、紹鷗など茶人の愛好により茶道具の花形となった。本学所蔵のものも室町後期のものが多数である。胎土は灰白色で、非常に耐火度が高く、堅く焼締り、その上白い小砂が壺の表面にぶつぶつと一面に出ていて、総体い薄赭色を呈している。本資料は室町時代後期の壺とされ、当時は茶壺であったと考えられる。高さ42cm、胴廻り102cmであり、堅く焼締り、その上に白い小砂がぶつぶつと一面に出ている。重厚な感を与える。

小鹿田焼について柳宗悦氏の「日田の皿山」と題した著名な紹介文があり、昭和6年5月26

日に書かれたもので、これにより一躍有名となった。……土地の人はそこを皿山と呼んでいる。この名は各地に窯を訪れる人には既に親しまれている呼び方である。皿を造る所、焼物の出来る場所、それを皿山と呼ぶ、朝鮮でよく沙里というに等しい。日田の皿山は大鶴村に属し、小字は小鹿田である。不思議にもこれを「おんだ」と読む。豆田を過ぎて筑後川に沿うて下り、夜明村から北へと折れれば大鶴村に達する。その行程は四里。……そしてこの窯の歴史が語られており、刷毛大皿が紹介されている。本学の大皿もこれと同様のものと思われるので、ここに紹介する。大分県日田市内とはいっても、英彦山^{ひこ}の谷あい^{さん}で、民家14戸のうち10戸が半農半陶の窯元で、素焼きにしないで、生地の上にそのまま釉薬をかける「生がけ」が特色で、白絵、刷毛目、櫛描、指描、流釉、天目、柿釉、飴釉、黄釉、緑釉などである。製品は実用品ばかりであり、水甕、酒甕、大壺、小壺、鉢、土瓶、急須、茶碗、徳利、花立、湯呑、皿、搥鉢、植木鉢、水注等である。民窯のふる里もいえるところである。本学資料は梶原藤徳氏寄贈とされており昭和48年3月寄贈されたものである。直系71cm、高さ11cmの大皿で刷毛目である

[角田芳昭]



信楽焼大壺（室町時代後期）



小鹿田焼刷毛目大皿
(昭和48年梶原藤徳氏寄贈)

資料利用状況

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「縄文文化・東からの流れ」展へ土器、石器、骨角器等38点貸出す。平成2年4月20日より平成2年6月20日まで

『総合歴史』（浜島書店）へ土版（北上市更木出土）及び石棒（出土地不明）を写真転載につき貸出す。平成2年4月12日付

『関西大学考古学等資料室紀要』第7号目次（平成2年3月）

舎衛城と祇園精舎（覚書（四））	網 干 善 教
——佛典にみる祇園精舎創建縁起（二）——	
延喜諸陵寮式再疑	波多野 忠 雅
——テキスト＝クリティークの問題——	
江戸中期の都市製造業と商品流通	吉 田 豊
近世初期風俗画における群像構成について（二）	
——旧舟本家本洛中洛外図屏風と天桂院本四條河原図屏風について——	山 岡 泰 造
松岡壽	
——岡山時代と江戸・聴香読画館時代を中心として——	宮 本 高 明
資料研究 関西大学蔵『古学先生伊藤君礪』拓本について	来 村 多加史
研究ノート 神田孝平の「地租改正」建議	角 田 芳 昭
鹿が春日の神の乗り物となった理由	田 中 久 夫
福田平八郎〈雨〉（昭和28年）について	上 園 四 郎
平成元年度「博物館実習総括」	博物館学課程
附録	
イ 考古学等資料室の歩み	} 考古学等資料室
ロ 『阡陵』（考古学等資料室彙報）1～20号目次	
ハ 『阡陵』＝関西大学博物館学課程創設20周年記念特集＝目次	
ニ 『関西大学考古学等資料室紀要』創刊号～6号目次	

編集後記

『阡陵』21号をここにお届けいたします。20号（毎年春秋2回刊行）までで10年が経過いたしました。この間多数の皆様のご指導、ご協力により続けて参ることができました。今後も誌面の充実を期すべく努力していくつもりですのでよりしくお願い申し上げます。

さて本号にも委員長の網干善教先生をはじめ、松浦章先生、非常勤講師の鶴崎、来村両先生の原稿をいただきました。感謝申し上げます。本文にも紹介いたしました3月中旬岡山県上房郡賀陽町吉川地区及び黒山地区の農具・民具の寄贈を受けることとなり現地へ出張しました。現地においては友人・重森計巳氏、難波弘泰氏の特別のご配慮により多数の農具、民具の寄贈を受けた上、賀陽町役場吉川支所長の掘求氏のご厚意により、4km離れている収集場所まで持参下された。ここに

感謝申し上げます。また黒山地区の農家の方々よりも多数の農具・民具資料の寄贈を受けました。誌上を借りて感謝申し上げます。（詳細については10～11ページ紹介文あり）今後はこの資料を整理し教育研究活動に有効に利用していきたいと考えています。今後ともご協力の程お願いするものであります。

表紙の「縄文土器」は岩手県北上市更木遺跡（旧和賀郡更木村）出土と伝えられるもので、更木出土資料を多数所蔵する。口縁部は波状口縁をなし、その下に3条の沈線を施し、雲形文が主文となる。続いて2条の凹線をつけ、その下側に縄文の施文がある。脚部は無文であるが、下端は波状となり縄文をつける。高さ11.3cm、口径15.1cm、脚台の底径8.7cm、形式は縄文晩期大洞C式土器といわれるものである。〔角田芳昭〕